

## 4. まとめ

レジストロにおける日系移民住宅は現地の堅木であるカネラ・プラッタを材木として使用した荒々しい造りではあるものの、建築の構造的には柱と梁からなるまぐさ構造に和小屋を用いた造りで、墨書の痕跡や寸法の特徴、文献資料の記述等を踏まえれば、日本人大工が尺貫法をはじめとする日本の構法に基づいて建設されたことが明らかである。この点は、建築研究家の米田氏による独自の調査結果として報告された傾向と符合する。

また、調査を行った日系移民木造住宅のうち、沖山スズ家住宅と沖山剛造家住宅、六川家住宅では高床形式として地盤から距離をとって1階床をつくる傾向が見られ、さらに沖山スズ家住宅の主屋や天谷家住宅、天谷捨吉家住宅では1階の階高を低めに抑えた二階建てとして建てられた傾向が見られた。前者は土地の勾配や自然環境に由来したものと考えられるが、後者は博物館明治村に移築された久保田家住宅とも共通する特徴である（なお、熊谷広子氏の論稿によれば、二階建ての日系移民木造住宅はレジストロ地域に特有の傾向のようである）。久保田家住宅では、階高の低い1階は納屋のような用途で、主な居室は2階に配置されている。他の二階建て住宅における当初の1階部分の使い方に関する記録は残されていないものの、当時の根拠資料が残る久保田家住宅の特徴から類推すれば、農作業の必要性から考えても、同様の使途であった可能性も考えられよう。

なお、沖山剛造家住宅をはじめ、本研究で調査を行った日系移民木造住宅では、畳の使用や床坐による生活の痕跡は見当たらなかった。移民最初期の住宅ではこうした和風の生活様式を継承していた可能性も考えられるが、大正後期から昭和初期にかけて建設されたと考えられる今回の住宅では、靴履きのままイス坐とベッドを用いた就寝による生活様式であったことが特筆される。

さらに、開口部の窓枠形状は、日本の同時代の民家には見られない特徴的な納まりとなっており、「レジストロ植民地の建築遺構から見た日系移民木造住宅の窓枠に関する一考察」で報告した。そこからは窓枠形状と窓間の寸法体系を通して、これまで判別することが難しかったレジストロにおける第二期の日系移民木造住宅の建設年代を大別できる指標となることが分かった。

日系移民がレジストロで過ごした最初期の住まいの状況については、外交史料館に史料が残されている。外交官の藤田敏郎が1920（大正9）年に記した「イグアペ地方巡回報告」では「當植民地ニ就職スルガ如ク一時腰掛的ニアラズ最初一、二年ハ眞ノ仮小屋ニ住スルモ三四年ニシテ相當ノ畜財ヲ得レバ瓦葺家屋ヲ新築シ仮小屋ハ變ジテ物置トナリ」と説明している<sup>1)</sup>。

この内容は、1916（大正5）年から入植が始まったレジストロの状況を記しており、到着直後は仮小屋での生活を強いられながらも、次第に定住を意識した居住性の高い住宅が新築されていったことが読み取れる。

レジストロでの最初期の住まい方は、土間のある仮小屋で、居住部分は床を上げていたことが既に報告されているなか、限定的ではあるが現地調査と文献調査をもとに、レジストロ

---

1) 本邦移民関係雑件 伯国之物 出張復命書：分類番号 3.8.2.285-5-1

における日系移民木造住宅の変遷について解説する（図 4-1、①：以下、番号は図中を示す）。

これまで調査してきたレジストロの日系移民木造住宅は、通風を確保するために外周部の床下は束立ちとしていたことが判明している。床束は『イグアッペ寫眞帖』に掲載されている村中次正家住宅などから確認できるが、はじめは木製であったことが分かる（②）。その一方で、工場や倉庫などで使用し床を設けない深澤家住宅の工場では土間を基本としている為に床束はなかったと言える（③）。

のちに両者の建物が一体化し、床を上げる必要のない工場や倉庫を 1 階に設け、2 階を住まいとする天谷捨吉家住宅や明治村へ移築されている久保田家住宅などの形式が 1920 年頃から登場するようになる（④）。

その後、住宅の床束が木製から煉瓦へ替わっていく。このきっかけは、1914（大正 3）年に瓦職人の善本元一を日本から呼び寄せたことに起因しており、事業が軌道に乗り始めると煉瓦の製作も手掛けるようになり、1920 年頃から煉瓦の床束が一般化することで、平屋建てに加え二階建ての住まい（⑤⑥）にも広く展開されていったと考えられる。

さらに、1 階を土間とする二階建ての住宅では耐久性をあげる為に、1 階部分の柱を煉瓦とした天谷家住宅で見られる形式が 1930（昭和 5）年頃に登場（⑦）したと推察される。

移民が始まった頃の植民地では、最適な土地が見つからず場所の移動に伴い、建物を移築することが一般的に行われていたなか、高価で調達することが容易くはない煉瓦を多用する建物は、その地に住み続けることを意味していたと推察できる。

レジストロでは日本より移住してきた一家の主が土地を所有し自身の土地を開拓する手法が採用されたことで、これまでとは異なる生活スタイルと共に、新たな住宅が考案されて行ったと位置づけられよう。

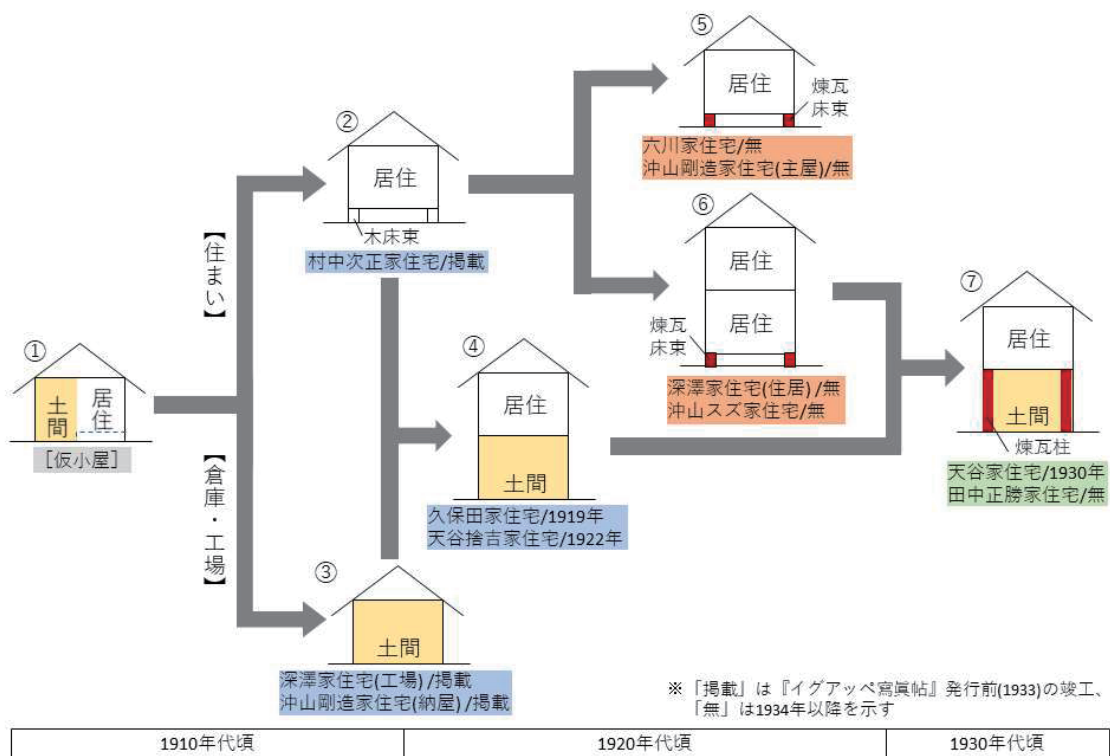


図 4-1 レジストロにおける日系移民木造住宅の変遷